

届け 世界の果てまでも

令和3年11月19日

No. 45

文章 篠長 飯久保一男

図工ぎらい？ 美術ぎらい？

有名な絵画，モネの「睡蓮」です。[鑑賞してみてください。](#)



睡蓮

大原美術館 蔵（岡山県）

クロード・モネ 作

（1840年～1926年）

モネは印象派の中心人物として知られている。

本作品は愛した睡蓮を題材に，季節や時間とともに変化する光の効果をとらえた一連作品の一つ。

岸や空を描かず，大胆に水面だけを描いた構図からは，日本美術の影響も感じられる。

モネは生涯に，250点以上の睡蓮を題材にした作品を作成した。

…著作権フリー画像を印刷したために鮮明ではないと思います。本校の印刷機では全家庭に配付の場合，これ以上精細な印刷ができません。

冒頭に，[鑑賞してみてください](#)と書きました。「睡蓮」の絵を見ていた時間と，右の解説を読んでいた時間とどちらのほうの方が長い時間だったのでしょうか。解説を読んでいる時間が長かったという方が多いのではないかと思います。または，「鑑賞？ 別にいいや」と，すぐにこちらの文章に進んだ方もいるかもしれません。

私自身，美術を学んでいたときでさえそうでした。美術館に行く機会は多くあったにもかかわらず，それぞれの作品を見る時間はそれほど長くなく，作品に添えられた解説などを読んで，なんとなく納得したような気になっていたのです。鑑賞というよりも，作品情報と実物を照らし合わせる確認作業のために美術館に行っていたような気もしています。

さて…，

この絵を見た4歳の男の子が「カエルがいる！」と言いました。[絵の中にカエルが見つかりますか？](#)

「カエル探し」をしていただいた方、申し訳ありませんでした。この作品に、カエルは描かれていません。実は、モネの250点以上ある「睡蓮」に、カエルが描かれたものは1枚もありません。

では、4歳の男の子が見つけた「カエル」とは何だったのでしょうか。その場にいた大原美術館の学芸員は、この絵の中に「カエル」がないことは当然知っていたはずですが、

「えっ、どこにいるの？」

と思わず聞き返したそうです。すると、その男の子はこう答えたそうです。

「いま、みずにもぐっているんだよ。」



本当の意味での「鑑賞」とは、こういうことなのかもしれないと思いました。その男の子は、有名な絵だからどうだとか、作者が有名な人だからどうだとか、解説にこう書かれているからなどと、様々な情報から正解を見つけようとはしませんでした。自分の感覚で作品を見て、その子なりの感じ方をしたのです。

小さい子どもは絵をかくことが好きです。文字を書けない幼児でも絵はかけます。人類の歴史においても、文字よりも先に絵があって、絵から文字が生まれてきています。子どもが小さいときにかいてプレゼントしてくれた「おとうさんの絵」「おかあさんの絵」を大事にしまってあったり、飾ってあったりする保護者も多いのではないのでしょうか。

それが、いつの間にか、絵をかくことが好きな子と苦手な子に分かれてしまうのです。ある調査によると、小学校の「図工」は、子どもたちの好きな教科の第3位だったそうです。

※図工で学ぶ内容は、絵だけではありません。現行の学習指導要領では「造形遊び」「絵や立体、工作に表す」「鑑賞」とされています。今号では、「鑑賞」と「絵に表す」ことを中心にとり上げています

ところが、中学校の「美術」になると、人気は下がるようです。それでも人気上位の教科なのですが、図工から美術の人気の落ち幅は全教科の中で1位になってしまうとのことです。中学校の美術教師が悪いのではありません。幼稚園・保育園から小学校の落ち幅のデータがありませんが、その方がもっと大きいかもしれないのです。小学校の図工の学習に問題があるのかもしれないのです。小中連携に問題があるのかもしれない。

小学校入学前から絵をかいてきた子どもたちに、小学校での図工で「好きなようにかけばいいよ」と、子ども任せにしておけば、やがて行き詰まります。「図工ぎらい」が出てしまうのは当然です。そこには指導が必要なのです。図工・美術や音楽などの芸術教科は、適切な指導があつてこそ、子どもたちの豊かな心を育むことになるのです。そのために私たち教師は研修を重ねています。

◇ 子どもは誰でも芸術家だ。

問題は、大人になっても芸術家でいられるかどうかだ。

パブロ・ピカソ



◇ ようやく子どものような絵が描けるようになった。

ここまで来るのにずいぶん時間がかかったものだ。

パブロ・ピカソ

